

“Indian Camp” についての一考察 — タブーの侵犯、再生、浄化の物語 —

上 垣 公 明*

A Study of “Indian Camp” — A Story of Violation of Taboo, Revival, Purification —

Kimiaki UEGAKI*

論文要旨

本稿では、ヘミングウェイの短編「インディアン・キャンプ」を取り上げ、日本の古代語にみられる、「坂」や「瀬」などに関する言説を参考にしながら、作品を考察した。作品の舞台設定にも注目し、作中の中心的な出来事を際立たせるために「日常空間→特殊空間→日常空間」という設定が用いられていることや、特殊空間としてのインディアン・キャンプの位置づけを劇的にするためにどのような工夫が見られるのかについて考察した。また、作品の構造にも注目し、主人公ニックの物語とその外の作品全体の物語から成る「二重構造」が作中に存在していることや、それによってどのような効果が作品にもたらされているかについても考察した。

はじめに

ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) の短編「インディアン・キャンプ」(“Indian Camp”) は、彼の最初の短編集『われらの時代に』(*In Our Time*, 1925) に収められた短編作品である。この短編集では主人公ニック・アダムズ (Nick Adams) が登場する作品が点在するが、この短編はその中のひとつである。この短編では、幼い少年ニックが父親で医師のヘンリー・アダムズ (Henry Adams)、叔父のジョージ (Uncle George) とともに、インディアン¹の妊婦の出産の手助けをするために出向いたインディアン・キャンプでの出来事が中心となっている。アダムズ医師は、生まれてくる赤ん坊が逆子であることがわかると、ジャックナイフと魚釣のハリスで帝王切開の手術を施し、成功させる。また、その妊婦と同じベッドの上段にいた夫が自ら命を絶つという衝撃的な出来事も作品に組みこまれている。

この作品は、『われらの時代に』のなかで最も注目されてきた作品のひとつであり、これまで様々な観点から考察がなされてきた。代表的なものとしては、この作品をニックのインディアン・

*大阪電気通信大学 工学部英語教育センター

キャンプでの出来事の体験を通しての開眼の物語（イニシエーションストーリー）として捉えるという考察があげられる。その代表的なものとして、ヤング（Phillip Young）の考察がある²。また、インディアン・キャンプを舞台としていることとも関係して、この作品をプリミティヴィズム（原始主義）の点から捉えるという考察もある。例えば、メイヤーズ（Jeffery Meyers）は、“‘Indian Camp’ reflects Hemingway’s ambiguous attitude to primitivism and shows his notable success in portraying the primitivism.”（11）と分析し、ヘミングウェイの原始主義への態度の反映をこの短編に見出し、作品を高く評価している。本稿では、このような考察を参考にしつつも、新たな視点として日本の古代語にみられる言説を取り入れ、これまでの考察とは少し異なる点から作品の再読を試みたい。日本の古来の世界観とアメリカ原住民のそれとでは、出発点が基本的に異なるものであることはいままでもない。その一方で、近代文明化される前の日本古来の世界観に、西洋文明化される前の原始主義的な特徴を多く有するインディアンの世界観に通じる部分があっても不自然ではないであろう。また、このような両者における共通点の発見は、そこに底流する文化的な普遍性のようなものの確認につながっていくかもしれない。例えば、国文学者の斎藤英喜は、古代語に関する著書『古代語を読む』の「〈歌〉と禁忌」という項目についての論考のなかで次のように述べている。

くうた>が、向こう側にある何かに取り憑かれるところに生成するといったとき、その憑くということが、「憑きもの」の習俗が示すような忌み嫌われる状態と伴ってあったことを考えておくべきだ。くうた>が何らかの禁忌にまつわって存在したということである。（略）そしてこのくうた>は、女神の禁忌に触れたことでうたい（よみ）えたものであると同時に、その禁忌を犯した罪を贖う（浄化する）ためにあったと考えられよう。（29）

上記は「うた」をめぐる日本の古代の世界観の一端を反映したものであるが、「うた」と禁忌の密接な関連性や、浄化を目的とした「うた」の必要性については、本論で取り上げるヘミングウェイの短編作品「インディアン・キャンプ」にも適用できるところがあるように思われる。この他にも、適用が可能であると思われる日本の古代語にまつわる分析を取り入れながら、作品を検討していきたい。

1. 特殊空間としてのインディアン・キャンプとタブーの侵犯

ヘミングウェイの短編「インディアン・キャンプ」の大まかな舞台設定は、ニックたちが元々いたキャンプから妊婦がいるキャンプへ移り、そして再び元のキャンプへ戻って来るといふ、いわゆる「振り子状」になっている。このような設定は作中における「日常空間→特殊空間→日常空間」という設定とも呼応しており、インディアンの妊婦の出産、その夫の自殺という重要な出来事が起こる場所を作品の中心に位置づけ、より際立たせる効果をもたらすものでもある。物語は、二人のインディアンの誘導によって主人公の少年ニック・アダムズ、ニックの父親で医師であるヘンリー・アダムズ、そして叔父のジョージが妊婦のいるインディアン・キャンプへと向かうところから始まる。彼らを乗せた二隻のボートが湖を渡って行くとき、あたりは暗闇につ

つまれている。The two boats started off in the dark. (15) また、水の上では寒く、ニックの乗っているボートからは前に行くジョージたちの乗っているボートはずっと霧に包まれている。…the other boat moved further ahead in the mist all the time. (15) このような状況描写によって、彼らがこれから向かう先が神秘性を帯びた未知の場所であるという印象が強められることになっている。メイヤーズは、ニック達の、元のキャンプから妊婦のいるインディアン・キャンプへの移動に言及し、彼らが向かう先を“the smelly, secluded, and morbid world of Indians” (18) という言葉によって特徴づけている。また、デファルコ (Joseph DeFalco) は、そのような移動について“their own sophisticated and civilized world of the white man” (161) から“the dark and primitive world of the camp” (161) への移動であるとし、両者がパラレルな関係であることを指摘している。

ニックたちは対岸に着いた後、インディアンの妊婦のいる小屋に向かうことになる。あたりはまだ暗く、提灯をさげた誘導役の若いインディアンを先頭にして、ニックたち一行は木材の切り出しのために作られた道をたどって丘をのぼっていく。このように提灯の灯りを頼りに列を成して夜道を登っていく一行の姿は、どことなく儀式に向かう集団のようにも見える。このような彼らの行動において注目したいのが、キャンプから妊婦のいる小屋にたどり着くまでの行程で「湖」と「坂」を通過して来たことである。このような「湖」や「坂」は古代の世界観においても、二つの世界を隔てるものとして重要な意味を持つものであったと思われる。三浦佑之は、「坂」や「瀬」について次のように述べている。

<坂>が異郷への出入り口であるということは、当然のこととして<異郷>という認識を内包してゆくことになる。(略)「河の瀬」と対になった「坂の御尾」は、領域としての「国」の端であり、八十神たちは、オホナムチの建てた国の外に排除されたのである。この<坂>や<瀬>は、象徴化された境界である。地形的にいても坂や瀬が共同体の境になっていることが多いから、対表現として固定化されていくのである。(80-81)

ここでは共同体の「境」の役割を果たすものとして「坂」や「瀬」があげられているが、このことは、「インディアン・キャンプ」における、二つの世界を分けるものとしての「湖」、「小屋へ続く上り坂」とも重なり合う。また、先述のように、作者が作品の劇的効果を高めるために二つの場所を明確に分けるという設定を意図的に用いているとすれば、「坂」や「瀬」の使用は、上記の引用の「象徴化された境界」としての「<坂>や<瀬>」が示唆するものとも合致するのである。

ニックたちが妊婦のいる小屋の近くの曲がり角のところに到着すると、一匹の犬が吠えだし、しばらくすると、さらに多くの犬が彼らに向かって飛び出してくる。They came around a bent and a dog came out barking… More dogs rushed out at them. (16) このような犬の攻撃的な行動は、あたかも部外者の侵入を牽制しているかのようである。そして、道の近くにある小屋の窓からは灯りがもれ、その小屋の入口の近くには一人の老婆がランプをもって立っている。An old woman stood in the doorway holding a lamp. (16) このような彼女の出で立ちはまるで門番のようであり、直前に出て来た「犬」同様に、部外者の侵入を強力に拒んでいるよう

でもある。このような一連の出来事によって、この場所の閉鎖性が高められ、さらには、侵入されざる場所としての神秘性を高めることにもなっていると考えられる。その意味では、この場所は先の引用に示されていた古代の世界観における「異郷への出入り口」が意味するところに近いものと考えられることができるであろう。

アダムズ医師、ニック、二人のインディアン、ジョージの五人が妊婦のいる小屋に入ると、妊婦はベッドの下で大きな毛布をかぶり、頭を横にむけて横たわっている。女性は二日前から、村のすべての女性たちによって出産の介助を受けていたのであった。そして、同じベッドの上段には、三日前に斧で足をひどく負傷した妊婦の夫がいるが、彼はパイプを吸っていて、部屋中にその匂いが立ち込めている。それは、まるで言葉を発することのない夫の無言の訴えのようでもあると同時に、その場所の神秘的な雰囲気醸し出すことにもなっている。

いずれにしても、インディアンの夫婦は数日前から同じ部屋の同じベッドの上段と下段という、極めて凝縮された空間において身動きが取れない状況にあるのであり、一定の場所に「閉じ込められている」と見なすことができるであろう。このような「閉鎖性」と「神秘性」を有した空間を考える際に参考にしたいのが、日本の古代の世界観における「こもり」の概念である。岩崎良子は再生の場としての「隠り（こもり）」の状態について、次のように述べている。

聖空間への〈こもり〉は、不可思議な呪力を身に受ける行為として考えられていたらしい。古代人は、おのれの肉体（カラ）の中に宿る魂（タマ）のはたらきを、具体的な生命力のあらわれとして知覚していた。聖空間への〈こもり〉には、その魂を賦活させる作用があると考えられていた。〈こもり〉の場は、生命力を再生させる場として理解されていたのである。(70)

ここでは「魂を賦活させる作用」があるものとして「聖空間へのこもり」が言及されているが、それはベッドの上段で横たわっている妊婦の夫の状態に通じる部分があると思われる。妊婦の夫は三日前に足を負傷した後、怪我の治癒と体力の回復のためにその場所で休養しているのであり、厳密に考えると、上記の引用で指摘されているような「魂を賦活させる作用」を有する「聖空間への〈こもり〉」とは趣が異なるが、「神聖な場所における復活のための休息」という点では、広い意味において共通する。また、上記の引用では「生命力を再生させる場」としての「こもりの場」についても述べられているが、子供の出産を「新しい命の誕生」という意味において「生命力の再生」と位置づけるならば、出産のために妊婦が小屋にこもっているという状況についても、上記の引用の「こもりの場」が示唆するところにも通じていくといえるであろう。

アダムズ医師は、キャンプを訪れた目的である妊婦の出産の準備に取りかかる。出産の苦しみから妊婦が叫び声をあげるのを聞いて、ニックは、アダムズ医師にそれを止めさせる方法が無いか尋ねる。しかし彼は、麻酔は持っていないし、妊婦の叫び声は重要ではないとして、ニックの訴えに耳を貸さない。“No. I haven't any anaesthetic,” his father said. “But her screams are not important. I don't hear them because they are not important.” (16) そして、そのような妊婦の叫び声に耐えかねたかのように、上の段にいる夫は壁のほうに向きを変える。The husband in the upper bunk rolled over against the wall. (16) このような妊婦の苦痛を重要視せず、麻酔を使用しないというアダムズ医師の態度には、西洋医術（文明）、ひいては、

ある種の上下関係に基づくアメリカによるインディアンに対する侵害という構図に発展させて考えることもできるであろう³。

そして、生まれてくる赤ん坊は「逆子」であるために、アダムズ医師は「帝王切開」の手術を施さなければならない。その手術を手伝うために、ジョージと三人のインディアンたちは妊婦が暴れないように押さえつける。Later when he started to operate Uncle George and three Indian men held the woman still. (17) このような四人の男たちが女性一人を抑えつけるという行為について、今村楯夫は「屈強な男たちによって暴行を受けている姿と重なる」(91)と指摘しているが、男たちによる女性への「強姦」のイメージを見て取ることは容易であろう。したがって、この場面では、西洋医術（文明）によるインディアンの侵害と、ひとりの女性に対する多人数の男たちによる暴行という二種類の「強者による弱者への侵害」が重なり合っており、そのことによって悲劇性がより強調されるという効果が生じているのである。

アダムズ医師は医療の設備が十分に揃っていないにもかかわらず、ジャックナイフと魚釣りのハリスで「帝王切開」の手術を成功させ、出産は無事に終了する。そして、そのことに気を良くして、彼は試合後の着替え部屋のフットボール選手のように、舌が軽やかになる。He was feeling exalted and talkative as football players are in the dressing room after a game. (18) しかし、そのような浮かれ気分が一気に吹っ飛ばされるような出来事が起こる。アダムズ医師はベッドの上段にいる妊婦の夫を覗こうとしてブランケットをめくるが、彼の目の前には次のような衝撃的な光景が広がっている。

The Indian lay with his face toward the wall. His throat had been cut from ear to ear. The blood had flowed down into a pool where his body sagged the bunk. His head rested on his left arm. The open razor lay, edge up, in the blankets. (18)

このように、妊婦の夫は喉を掻っ切って死んでおり、夫の体の重みでできたベッドのくぼみには血だまりができていのである。そして、彼の死因については、後にアダムズ医師によって、耐えきれずに死んだのではないかという推測が述べられているだけである。“He couldn't stand things, I guess.” (19) 作品を通して妊婦の夫は一言も発しないし、三日前に足をけがしたこと、壁側に向きを変えたことの他に、彼についての情報が提示されることもない。まるで、彼が死の謎も含めて、それに関するすべてのことを背負い込んで死んでいったかのようなようである。その一方で、彼の死に関連する情報の少なさゆえにその不可思議さが強められ、結果的に、彼の死の閉鎖性、神秘性が高められることになっていることも確かである。

このように不可思議な点を多く含んだ妊婦の夫の死は、この作品の最も重要な点の一つでもあり、これまでも度々注目されてきた。例えば、メイヤーズは“The husband cannot bear this defilement of his wife's purity, which is far worse than her screams.” (19) と述べ、自殺の理由として、妻の純潔を守れなかったことをあげている。また、ウィニック (Charles Winnick) は“The farther simulates the wife's activities in order to get all the evil spirits to focus on him rather than her.” (137) と述べ、夫の行為について妻に代わって悪霊を引き受けることによって妻を守るという行為であると分析している。いずれにしても、アダ

ムズ医師は、ある種の傲慢によって妊婦の夫を死に追いやってしまったことを認めざるをえないのであり、医師としての誇りを著しく傷つけられるという結果になっている。

ここで、妊婦の夫の死を検討するに際して、少し観点を变えて、彼が流した「血」に注目したい。作中では、夫の死の場面では「血だまり」に示されるように、「血」によって夫の死の場面の凄惨さが印象づけられている。このような「血」については、古代の世界観における「赤」のシンボリズムに関する考察が参考になると思われる。森朝男は「血」に関係するものとしての赤色をめぐるフォークロアに言及し、次のように述べている。

赤色は一般に神の示現や憑依の徴表を意味し、めでたいこととしるしとなり、したがって魔除けの効用を持ったりする。(略) この赤色のシンボリズムは、また月経や出産の血液の赤色にも相通じている。月経中の女の物忌み期間は、観念としては神の到来を迎えている期間であった。(21)

ここでは、「めでたいこと」や「魔除け」といった肯定的なものと同様に「赤色」があげられ、さらに、「赤色のシンボリズム」に関係するものとして「月経や女性の出産の血液の赤色」があげられていることに注目したい。妊婦の夫の死の場面において血が強調されていることについてはすでに見た通りであるが、それとは対照的に、妊婦の出産の場面では、アダムズ医師による手術の行程が淡々と描かれているだけで、血に関する描写は全く見られない。それはまるで、妻の出産(手術)において不可欠であるはずの血の欠如を夫の血が補っているかのである。また、それは夫が血を流すことによって妻の出産に協力しているという図式として捉えることも可能であろう。このように、日本の古代の世界観における「赤のシンボリズム」に注目することによって、夫とは無関係と思われる出産を通して、夫の役割が浮かび上がってくるのは、非常に興味深いところである。

アダムズ医師は、上記のような凄惨な光景をニックに見せないように、とっさに彼を外に出すように指示するが、台所のドアの近くにいた彼はそれを目撃する。幼い子供にそのような場面を見せてしまったことによって彼が動揺する様子は、“I’m terribly sorry I brought you along; Nickie,” (18) という言葉に見て取ることができる。特に“Nickie”という呼び方には、息子に対してへりくだっているような様子が如実に窺える。このように、アダムズ医師は、先に見たような西洋医療を楯とした傲慢によって妊婦の夫を死に追いやるといった医師としての失態に加えて、ここでは父親としての失態を演じているのであり、医師、父親の両方の立場においてプライドを喪失していることになる。デファルコは、このような状況におけるアダムズ医師について“… the father has been stripped of his own protective mask, the doctor-scientist persona, and he is forced to deal with the situation as a man with an unmasked ego.” (162) と述べ、彼が医者、科学者としての防御の仮面をはがされた状況におかれていると分析している。

さらに注目したいのは、このようなアダムズ医師と先述のインディアンの妊婦の夫との対照性である。多くを語り、最終的に自身の威厳を失うニックの父親の姿と、何も語らずに死を選ぶことによって威厳を保つ妊婦の夫の姿とは非常に対照的である。また、「父子の関係」という点においても、アダムズ医師が自身の傲慢さによって息子に対して失態を演じたことと、妊婦の夫が

自らの血（命）と引き換えに出産を成功させることによって、間接的にはあるが、父親としての威厳を示したことにおいても、両者には非常に明確な対照性を見出すことができる。そして、このような両者の対照性によって、前者の浅はかさと後者の深遠さが一層際立つという効果が生じていると考えられるのである。

2. 二重構造と浄化の物語

妊婦の出産は無事に成功し、アダムズ医師らの一行は小屋を後にして湖の方へと降りて行く。そのとき、あたりは明るくなっている。一行は朝の訪れとともにその場所を後にしているのであり、ここでは「夜＝非日常空間←→朝＝日常空間」というように、場所と時間とが呼応していることが確認できる。このような呼応によって、昨夜の一連の出来事が夜の時間での特殊空間における出来事であったことが強調されていることはいうまでもない。

一行が湖へと向かっていく途中で、ニックはインディアン・キャンプでの体験によって生じた死についての疑問を解決しようとして、父親のアダムズに立て続けにいくつかの質問をする。少し長くなるが、ここで、二人の会話に耳を傾けてみたい。

“Do ladies always have such a hard time having babies?” Nick asked.

“No, that was very, very exceptional.”

“Why did he kill himself, Daddy?”

“I don't know, Nick. He couldn't stand things, I guess.”

“Do many men kill themselves, Daddy?”

“Not very many, Nick.”

“Do many women?”

“Hardly ever.”

“Don't they ever?”

“Oh, yes. They do sometimes.”

“Daddy?”

“Yes.”

“Where did Uncle George go?”

“He'll turn up all right.”

“Is dying hard, Daddy?”

“No, I think it's pretty easy, Nick. It all depends.” (19)

ここでのやり取りにおいてニックは全部で七つの質問をしているが、最初の出産についての質問と、二番目の叔父のジョージについての質問の他は、全て死についての質問である。そのことはニックの死に対する関心の強さを示しているといえる。これらのニックの質問に対する父親の返答に注目すると、最初の質問には“very, very exceptional”と答え、その次の妊婦の夫が自殺した原因についての質問に対しては、“I guess”という言葉に示されるように、あくまでも彼自

身の個人的な見解として意見を述べていることがわかる。さらに、その次の男性と女性の自殺の頻度に関する質問に対しては、“Not very many, Nick.” さらに “Hardly ever.” と答え、男性の方がその頻度が高いことを端的に伝えているだけである。最後のニックによる “Is dying hard, Daddy?” という質問に対しても、彼は “No, I think it's pretty easy, Nick. It all depends.” と答えており、二番目の質問への返答のときと同じように、個人的な見解としての意見であるという印象が強い。

上記の一連のやり取りの全体的な印象としては、ニックは死の疑問を解決すべく、好奇心の赴くままに、疑問に思ったことについて率直に父親に尋ねているようである。その反面、幼い少年の質問としては、男女の自殺の頻度についての質問に示されているように、冷静さ、客観性をも含んだものであることも感じ取れる。ましてや、この会話が、ニックが衝撃的な場面を目撃した直後のものであること考慮すると、なおさらである。それに対して、父親の応答は、死への不安を息子に与えないための配慮もあってか、断定的な見解は避けられており、全体的な印象としては死の核心に迫るというよりは、その周辺をなぞっているだけという印象がぬぐえない。少なくとも、一連の父親の説明によって、ニックが自らの疑問について充分満足できる回答が得られたとは思えない。さらに、このやり取りが、父親がインディアンの夫の死の場面をニックに目撃させてしまうという失態を演じた後のものであることも、彼の言葉の説得力を弱める要因になっている。したがって、ニックが死の問題について何らかの確信を持ちえたとは考えにくく、その結果として、死は「あいまいなまま」置き去りにされていると見なすことができる。

アダムズ医師たちの一行は、湖に着いてボートに乗り込み、次のようなボートの場面の描写で作品は締めくくられる。

They were seated in the boat. Nick in the stern, his father rowing. The sun was coming up over the hills. A bass jumped, making a circle in the water. Nick trailed his hand in the water. It felt warm in the sharp chill of the morning.

In the early morning on the lake sitting in the stern of the boat with his father rowing; he felt quite sure that he would never die. (19)

ここで注目したいのは、最後の “...he felt quite sure that he would never die” という、彼の死なないことの確信を示す一文である。これは文字通りに解釈すれば、死なない確信という、肯定的な意味を持つものと解釈できる。また、作品の締めくくりの場面におけるこのような描写は、インディアン・キャンプでの出来事を経験したことによるニックの「成長」や「開眼」を示唆するものとも考えることもできるであろう。実際に、この一文は、この作品をニックの成長物語と位置づける根拠としても取り上げられてきた。このように、この一文を肯定的に解釈する例として、モンテイロ (George Monteiro) は “Partly a childish, illusory sense of immortality, this statement is also a resolution, since at that moment Nick knows death only in the guise of a particularly ugly suicide.” (154) と述べ、多少子供じみた空想的なところはあるが、この主張は彼の決意であると論じている。その一方で、先に触れたように、父親とニックとの会話の内容からすると、ニックが死の問題に納得したと単純には考えにくいのも事実である。

さらに、先述の「あいまいなままの死」の流れからしても、最後の場面のニックの確信の言葉はそのまま受け取るには少し無理があるように思われる。このように、上記の一文を否定的なものとして解釈する例としては、デファルコの考察があげられる。氏は“… Nick has been exposed to some of the primal terrors of human experience, and his “feeling” is depicted as illusory and child-like because it is a romantic reaction to the experience he has undergone.” (32) と述べ、ニックが経験したことへの反応としては非現実的な反応であるとして、彼が抱いた確信は空想的で子供っぽいものであると論じている。

上記のような対照的な論考に示されるように、この一文をめぐるのは解釈が大きく分かれる一方で、それが作品全体の解釈にも関係してくる非常に重要なものであることは明らかである。そこで、この一文を含む最後の場面を考察するに際して、少し視点を変えて、上記の引用箇所において挿入されている“The sun was coming up over the hills. A bass jumped, making a circle in the water.”の二文に注目したい。初めの文の太陽が丘に昇り始めたことを示す描写は、インディアン・キャンプの丘が太陽に照らされることを示しており、肯定的なイメージを喚起するものとして捉えても問題ないであろう。

二つ目の文で示されている「魚の水面からの飛翔」については、非常に重要なモチーフを含んでいるように思われる。まず注目したいのは、作品を締めくくる重要な場面で登場人物とは関係のない「魚」が、突然、登場している点である。この場面における「魚」の登場は、一見すると、不可思議なようにも思えるが、「魚」という「人間ではない生物」であるという、そもそもの特徴（条件）に注目する必要があるのではないだろうか。つまり、そのような特徴によって、その「魚」は、人間の世界とは完全に切り離された、まったく別の次元に存在することが可能になり、その結果として、周りの状況を寄せつけない気高さが生み出されることになっていると考えられるのである。また、そのような観点からこの「魚」を眺めた場合、周囲の状況から完全に孤立した状況において自らの意志で死を選んだインディアンの妊婦の夫とも、不思議と重なり合うのである。

このように見てくると、最後の場面の「魚」については、いかなる「人間の登場人物」をもってしても到達できない域に達しているという意味において、非常に肯定的なものとして位置づけることができるのではないだろうか。さらに、この二文については、初めの文では太陽の上昇、後の文では魚の飛翔が描かれており、「上昇」のモチーフを共有していることになるが、そのことも、この二文に肯定的な印象をもたらす要因になっているといえる。

以上のことから、この二文は「インディアン・キャンプ」において、供犠としてのインディアンの夫の死を含めた儀式の完結、すなわち、あるべき姿としての生死の儀式の完結がなされ、さらに、それによる作品世界の浄化が成立したことを意味していると解釈することができるであろう。

最後に、この二文における他の描写からの独立性という点に注目したい。先に引用した作品最後の場面は、基本的に、ニックについての描写から成り立っているが、この二文だけは、その前後の描写から完全に独立した情景描写になっている。そのことは、作品の構造を考える上で、大きな意味を持っているように思われる。つまり、その二文による描写が「ニックの物語」の外に位置するものであること、すなわち、作品が「ニックの物語」の外に「作品全体の物語」があるという「二重構造」になっていることをも意味していると考えられるのである。そして、このよ

うな「二重構造」によって、先に見たような「ニックの物語」としては「死」の問題は明確に解決されていない一方で、「作品全体の物語」としては、儀式の完結によって「死」の問題は解決し、浄化が成立したという二元的な解釈が可能になっているのである。

ここで今一度、小論の「はじめに」において引用した吉田文憲の言葉を思い出してみたい。氏は、「うた」は「向こう側にある何かに取り憑かれるところに生成」し、「何らかの禁忌にまつわって存在した」こと、さらに、それが「女神の禁忌に触れたことであらう（よみ）えたものであると同時に、その禁忌を犯した罪を贖う（浄化する）ためにあった」ことを指摘している。このような指摘に、本論で明らかになったことを照らし合わせてみると、どのようなことが考えられるであろうか。「向こう側にある何か」に相当するものとしては、西洋文明の世界の対極に位置する、未知で神秘的な世界としての「インディアンの世界」が考えられるであろう。「禁忌の侵犯」については、ニックたちのインディアン・キャンプへの侵入、さらにはアダムズ医師による西洋医術のインディアンの妊婦への押し付けに、それに相当するものを見出すことができるであろう。また、「贖い」については、「儀式における生贄」という意味において、インディアンの妊婦の夫の死を当てはめることができるであろう。さらに、アダムズ医師の威厳の喪失も、禁忌を犯したことに對する報いという意味において、「贖い」に準ずるものとも考えることも可能であろう。「浄化」については、物語の最後の場面における「太陽の上昇」や「魚の飛翔」のなかに、その示唆を見出すことができるであろう。

まとめ

ヘミングウェイの短編小説「インディアン・キャンプ」について、「坂」や「瀬」、「こもり」、「赤のシンボル」、「禁忌の侵犯」といった日本の古代の世界観を参考にしながら、考察を行ってきた。それらを通して、いくつかの興味深い類似点を見出すことができた。それらは、地理的、時間的な差異を超越した文化的な普遍性を示唆するものとしても、重要な意味をもつものであろう。

また、作品を劇的にするための舞台設定において、インディアンの妊婦の出産などの重要な出来事を中心に位置づけるために、日常空間と特殊空間とが対照的なものとして位置づけられていることについても、考察してきた通りである。

作品の構造については、「ニックの物語」としては死の「あいまいさ」が保持されつつも、「作品全体の物語」としては肯定的な結末となっているという、二元的な解釈を可能にするという非常に絶妙な「二重構造」が、作品に内包されていることを指摘した。

註

- 1 アメリカ原住民のことを指しているが、作品では「インディアン」(Indian)と言及されているので、本稿での表記としてはそれにしたがうことにする。
- 2 そのような解釈の代表的なものとして、ヤング (Phillip Young) は、全部で七つあるニックが登場する物語のなかで、“Indian Camp”を典型的な ‘Nick Adams story’ であるとして、次のように述べている。
“A typical Nick Adams story is of an initiation, is the telling of an event which is violent or

evil, or both, or at the very least is the description of an incident which brings the boy into contact with something that is perplexing and unpleasant.”

- 3 高野泰志は、アダムズ医師が妊婦の帝王切開に際して、麻酔を使用しようとしなかったことの背後に、アメリカの帝国としてのイデオロギー的なものの存在を指摘し、「いわば帝国の欲望が、民族的他者の痛みを覆い隠している」(158) と論じている。

Works Cited

- DeFalco, Joseph. *The Hero in Hemingway's Short Stories*. Pittsburgh : Uof Pittsburgh P, 1963.
- 一. “Initiation (‘Indian Camp’ and ‘The Doctor and the Doctor's Wife’).” *The Short Stories of Ernest Hemingway: Critical Essays*. Ed. Jackson J. Benson. Durham, NC : Duke UP, 1975. 159-67.
- Hemingway, Ernest. *In Our Time*. 1925. New York : Scribner's, 1958.
- 今村楯夫「ニックと森とインディアン」日本ヘミングウェイ協会編『ヘミングウェイを横断する—テキストの変貌』1999年
- 岩崎良子「こもり」古代語誌刊行会編『古代語を読む』(桜楓社, 1989)
- Meyers, Jeffery. *Hemingway Life into Art*. New York : Cooper Square, 2000.
- 三浦佑之「さか」古代語誌刊行会編『古代語を読む』(桜楓社, 1989)
- Monteiro, George. “The Limits of Professionalism : A Sociological Approach to Faulkner, Fitzgerald and Hemingway.” *Criticism* 15, 1973.
- 森朝男「いろ」古代語誌刊行会編『古代語を読む』(桜楓社, 1989)
- 斎藤英喜「うた」古代語誌刊行会編『古代語を読む』(桜楓社, 1989)
- 高野泰志「麻酔の認識論 — 「インディアン・キャンプ」をめぐる帝国の欲望」天理大学アメリカス学会編「アメリカス研究」第10巻, 2005年
- Winnick, Charles. *Dictionary of Anthropology*. New York : Philosophical Library, 1956.
- Young, Phillip. *Ernest Hemingway : A Reconsideration*. University Park : Pennsylvania State UP, 1966. 31.

